

大学院進学者の情報行動と意思決定

中田 周育

1990年代に行われた大学院重点政策により、大学院進学者は増加し、平成27年度では71,966名が大学院に進学している。現在の大学院教育は、研究室での教育と研究が重視されているが、大学院進学者が研究室に所属した際に一定数が研究室とのミスマッチを起こしている。このような事は大学院進学者が大学院進学を決める際に研究室についても考慮し、十分に情報を収集できていれば防げると考えられる。しかし、大学院進学者が実際に大学院についてどのように情報を収集しており、どのように大学院進学を決めているかを行った研究は少ない。本研究では大学院進学者がどのように情報収集を行うかという情報行動と、三つの意思決定要因を明らかにすることを研究目的にする。三つの意思決定とは、一つ目は大学院に進学を決める意思決定、二つ目はどの分野に進むかを決める意思決定、三つ目はどの大学院に進学するか決めるといふ意思決定である。

調査では修士課程、博士前期課程の1、2年生の計15名に半構造化面接を行った。質問内容は、大学院進学について考えはじめた時期、大学院進学を考えたまっかけ、大学院について調べた事、大学院についてどのように調べたか、大学院について進学する際に考慮した事を尋ねた。得られた発話データから文字を起しSCAT分析を行った。SCATは、<1>データの中の着目すべき語句<2>それを言い換えるためのデータ外の語句<3>それを説明するための語句<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを付していく。<4>で得られた概念・テーマは紡がれて記述されストーリー・ラインを構成する。SCAT分析を行う際の観点として、意思決定に関わる要因、情報源を選んだ理由と気持ちに着目して分析をした。

結果、大学院進学者が進学を決める意思決定要因として、<大学院修了後の進路><教員との関わり><研究を継続したい思い><学びを深めたい思い><自分の周りの進学><両親の進学に対する態度>の6点の構成概念が得られた。進学する分野を決める意思決定要因として、<学部での授業による興味の変化><抱えてきた問題意識><今までの学びを最大限に活かせる場><広く受け入れてくれる学際分野>の4点の構成概念が得られた。進学先の大学院を決める意思決定要因として<資格の環境><専門分野の有無><生活環境・立地><経済的負担><同期や友達><受け入れの体制>の6点の構成概念が得られた。

研究科のHPや大学院説明会といった大学院が提供する情報だけでなく、大学院に所属する先輩と教員に話や相談をすることで得られる情報が進学先の大学院を決める意思決定に関わることが明らかになった。大学院は提供する情報の内容だけでなく、情報を提供する環境について考慮することで、よりよい情報提供が可能になる。

(指導教員 逸村 裕)